

# 韓国語の漢字表記と日本語の漢字表記の対照・比較

## — 韓国語教材の作成に向けて（その1） —

李 潤 玉

### 1. 本論の目的

日本人学習者にとって、韓国語は学びやすい言語の一つである。筆者がこのように主張する理由には、まず以下（1a-b）に示すように日本語と韓国語は似通った統語構造を持っているということが挙げられる。

(1) a. 日本語：	私は	花子	です。
	subject	complement	verb
韓国語：	나는	하나코	입니다.
	subject	complement	verb
(1) b. 日本語：	私は	料理を	作ります。
	subject	object	verb
韓国語：	나는	요리를	만듭니다.
	subject	object	verb

また、韓国語と日本語との間には「漢字を用いる」という共通点もある。これらのことから、日本人学習者にとって韓国語は親しみやすい言語の一つと言える。しかし、二点目の「漢字を用いる」という共通点がかえって日本人学習者に混乱を及ぼしてしまう可能性もある。それは、同一指示物を表す場合に、日本語の漢字表記と韓国語の漢字表記とでは異なる漢字を用いる場合があるからである。本論の目的は日本語学習者が間違いやすい韓国語の漢字表記と日本語の漢字表記を対照・比較させ、それぞれの表現が示す概念を分析することで、日本人学習者にとって有益な韓国語教材を作成することである。<sup>1)</sup>

### 1.1. 具体例

では、本論で分析対象とする韓国語漢字表記と日本語漢字表記の実例の一部を以下の表にまとめる。

<日本語漢字表記>	<ハングル表記>	<韓国語漢字表記>
出社	출근	出勤
退社	퇴근	退勤
円高	엔고	円高
円安	엔저	円低
敗北	패배 <sup>2)</sup>	敗北
下心	저의	底意
長所	장점	長点
短所	단점	短点
単位	학점	学点
会得	터득	摠得
暗証番号	비밀번호	秘密番号
先祖	조상	租上
授賞式	시상식	施賞式
帰宅	귀가	帰家
教頭	교감	校監
将来	장차	将次
優先座席	경로석	敬老席
金持	부자	富者

## 2. 方法論

本論文では、主に韓国語と日本語を分析対象言語とする。そこで、以下で述べる二つの方法論を用いてこれらの両言語の類似点・相違点を分析する。その一つは認知言語学である。韓国語母語話者と日本語母語話者との表現における類似点と相違点を明らかにするためには、「『言語』は『人間のモノの見方』の表れである」とい

う認知言語学的見地からの分析が好ましいと考える（認知言語学については、2.1. で詳述する。）。また、もう一つの方法論は、漢字の解字を用いることである。本論文の分析対象は漢字語である。よって、それらの漢字がどのように成り立ったかを示す解字は、有力な資料となりうる。

## 2.1. 認知言語学

日本における外国語教育は偏に機械的丸暗記に頼ってしまう傾向にある。このような現状を打破するために、語学指導への認知科学の導入が図られている。言語とは人間の外界認識の表れであり、母語話者の大脳に潜む言語習得の装置を明らかにすることが言語教育においても重要になる。つまり、母語話者が如何に外界を認識しているのか、ということが言語表現に反映されており、そのメカニズムを分析し言語指導に応用することで、機械的丸暗記に頼らない言語表現の論理的解釈が可能になる。

認知言語学的見地から日本語表現と韓国語表現を分析することで、両母語話者が如何に外界の事象を捉えているのか、共通した捉え方をしている点や異なる捉え方をしている点が浮き彫りになってくる。

## 2.2. 漢字の解字

本論文では韓国語漢字表記と日本語表現の比較・対照を行う。漢和辞典で「安」を引くと一つの漢字に、複数の意味（字義）が与えられている。そのような記載の具体例を以下（1）に示す。

### （1）安

①やす - い（やすし）。やす - らか。

㉞しずか。おだやか。「平安」

①落ち着く。

㉞おもむろ。ゆるやか。

②やす - んずる（やすんず）。

㉞やすらかなになる。落ち着く。静まる。定まる。

- ㉠やすらかにする。やすらかに治める。「治安」
- ㉡安心する。満足する。
- ㉢楽しむ。好む
- ㉣甘んずる。
- ㉤おく（置）。すえる。
- ㉥やすらぎ。やすらかさ。楽しみ。
- ㉦やすんじて。安心して。静かに落ち着いて。
- ㉧いず - くに（いづくに）。いず - くにか（いづくにか）。いず - くんぞ（いづくんぞ）。

— 『新漢語林』(s.v. 安) (下線筆者)

このような記載から、学習者は「安」という漢字が表す字義を知ることができる。しかし、それぞれの字義の繋がりを導くことは出来ない。つまり、これらの記載を機械的に丸暗記する他ないのである。このような機械的丸暗記学習を脱却するには、解字に注目する必要がある。解字とは、その漢字の成り立ちを示すものである。その漢字が持つ「原義」を解字から窺い知ることが出来るのである。どのような漢字でも、その漢字が生まれた時には必ず唯一の意味を持っていたはずである。そこから、意味拡張していく過程に「人間の認識」が反映されるのである。つまり、解字（原義）から派生した種々の意味は機械的丸暗記に頼ることなく、論理的推論により導くことが出来るのである。

このような理由から、筆者は韓国語の漢字表記と日本語表現との比較・対照するための方法論として、「認知言語学」と「解字」を採用する。

### 3. 本論

では、上記の日本語表現と韓国語表現との対照表に示した漢字語を上から順番に分析する。

#### 3.1. 日本語「出社」⇔「退社」と韓国語漢字表記「出勤」⇔「退勤」の分析

まず、上表中の日本語表現「出社」と「退社」は対義関係にある表現である。し

かし、「入社」と「退社」は表裏・体となってぴったり重なりあうような対義関係とは言えない。このことは、以下 (1a-b) に示す辞書記載からも明らかである。

(1a) 退社

- ①勤務している会社を辞めること。「一身上の都合で一する」「定年一」  
⇔入社。  
②その日の勤めを終えて会社から退出すること。「五時半に一する」  
⇔入社。

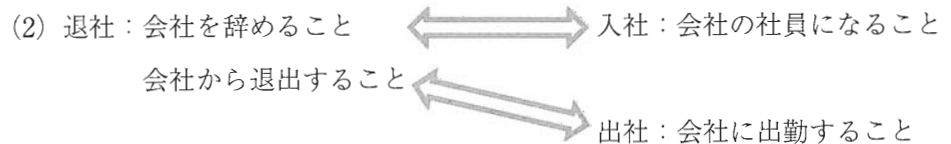
—『大辞泉』(s.v. たい - シャ【退社】)

(1b) 入社

会社に出勤すること。「午前九時に一する」「一時間」⇔退社。

—『大辞泉』(s.v. しゅつ - シャ【入社】)

まず (1a) から、「退社」は二つの事象を表示することがわかる。それらは「会社を辞める」事象と「その日の勤めを終えて会社から退出する」事象である。つまり、「退社」という表現は ambiguous (曖昧な) 表現である。他方、「入社」は「会社に出勤する」事象のみを表す。つまり、「入社」と「退社」は単純な対義関係でなく、以下 (2) に示すような関係性にある。



このような対義関係が生じる理由として考えられるのは、漢字「退」が持つ概念が漢字「入」、漢字「出」の両者のいずれとも相反する概念を持っているからであると考えられる。そこで、これら三つの漢字の概念を明らかにするために以下 (3a-c) に、それぞれ「退」、「入」、「出」の解字を示す。

(3) a. 退

会意。もと「日 + 夂 (とまりがちの足) + 辵 (足の動作)」で、足がとまって進まないことを示す。下へさがって、低い所に落ち着くの意を含む。

— 『漢字源』 (s.v. 退) (下線筆者)

(3) b. 入

指示。↑型に中へつきこんでいくことを示す。また、入り口を描いた象形と考えてもよい。内の字に音符として含まれる。

— 『漢字源』 (s.v. 入) (下線筆者)

(3) c. 出

会意。足が一線の外にでるさまを示す。

— 『漢字源』 (s.v. 出) (下線筆者)

これらの解字から、「退」は本来「足が止まる」事象を表した漢字であり、そこから「しりぞく」概念を表示するに至ったことがわかる。ただし、この「しりぞく」は「後退 (あとずさり)」の概念である。他方、「入」は「(前向きに) 中へつきこんでいく」事象を、「出」は「足が一線の外にでるさま」をそれぞれ漢字化したものである。つまり、「退」は「足が止まる」事象を示しているのに対し、「入」と「出」はいずれも「足を進める」事象を表した漢字なのである。このような「退」と「入」及び「出」との原概念における対義関係があるからこそ、日本語表現において「退社」⇔「入社」、「退社」⇔「出社」という複雑な対義関係が生じるのである。

また筆者は「退」、「入」、「出」の解字から、「退」と概念的な対義関係が深いのは「入」であると考え<sup>3)</sup>。それは、「退」には「足が止まる」事象から「後退りする」、つまり「下へさがる」という意を含むようになった、と示されており、「入」は「中へつきこんでいく」事象を示しているからである。つまり、「退」が示す方向性概念は「後」であり、「入」が示す方向性概念は「前」と言えるのである。さらに言えば、「退」概念行為を遂行するには、「入」概念行為の遂行時と(移動物の) 体の向きが同じのまま正反対の移動をするのである。(「前後」の方向性については 3.3. で詳述する。) このように、「退」と「入」からは、各々「後」「前」

という方向性の対立関係が見てとれるのである。しかし、「出」には、そのような「後退り」概念が包含する方向性と対義関係にある方向性概念はない。では、「退」と「入」とが対義関係にあるとして用いられている表現を以下(4a-f)に示しておく。

- (4) a. 「退廷」 ⇔ 「入廷」 (「出廷」が「入廷」と対義関係にないことは『大辞泉』を参照)
- (4) b. 「退室」 ⇔ 「入室」 (「\* 出室」)
- (4) c. 「退会」 ⇔ 「入会」 (「\* 出会」)
- (4) d. 「退場」 ⇔ 「入場」 (「出場」は「欠場」と対義関係にあることは『大辞泉』を参照)
- (4) e. 「退院」 ⇔ 「入院」 (「\* 出院」)
- (4) f. 「退団」 ⇔ 「入団」 (「\* 出団」)

また以下(5a-b)に示すように、漢字「退」は漢字「進」とも対義関係語として用いられる。これは、「退」がもつ「後ろ(へ退く)」事象を示す一方で、「進」が「前(へ進む)」事象を表すからである。

- (5) a. 「退路」 ⇔ 「進路」
- (5) b. 「退歩」 ⇔ 「進歩」

これらの対義関係からも、「退」が「後」という方向性概念をもっていることが明らかになる。

すでに述べたように日本語の「退社」は唯一の対義表現をもっているわけではない。それは、「退社」という表現が ambiguous (曖昧な) 表現だからである。他方、韓国語漢字表記の対義関係は「出勤」⇔「退勤」であり、どちらの表現も ambiguous でなく、両者の意味が明確に認識できる。

### 3.2. 日本語「円安」⇔「円高」と韓国語漢字表記「円低」⇔「円高」の分析

次に、日本語表現「円安」⇔「円高」と韓国語漢字表記「円低」⇔「円高」のそれぞれの対義関係について論じる。まず、韓国語漢字表記を分析するために、「低」と「高」の漢字辞典における解字の記載を以下(1a-b)に示す。

(1) a. 低 低

形成。人+低(低)。音符の低は、その意。人の中でも背丈が底のもの、ひくいの意味を表す。

— 『新漢語林』(s.v. 低 低)

(1) b. 高 高

象形。高大な門の上の高い楼の形にかたどり、たかいの意味を表す。

— 『新漢語林』(s.v. 高 高)

韓国語漢字表記で用いられる「低」と「高」の解字に着目すると、「低」は「人の背丈が低い」ことを示し、「高」は「建物(門)の高さが高い」ことを示していることがわかる。もともと、「低」と「高」の両漢字が指し示す対象物は異なり、それぞれ「人」と「建物」の高さを示していたが、両漢字ともに或るもの「高さ」を示した漢字であることには相違ない。この点で韓国語漢字表記の「円低」⇔「円高」は論理的に解釈できる。

他方、日本語表記の「円安」⇔「円高」における「安」と「高」とには一見すると論理的な対義関係がないように思われる。そこで、このような対義関係が生じるメカニズムを解明するために、漢字「安」の解字を以下(2a-b)に示す。

(2) a. 安

会意。「宀(やね)+女」で、女性を家の中に落ち着かせたさま。

— 『漢字源』(s.v. 安)(下線筆者)

(2) b. 安

会意。宀+女。家の中で女性がやすらぐさまから、やすらかの意味を表す。



—『新漢語林』(s.v. 安) (下線筆者)

これらの解字から、「安」は本来、女性が「落ち着く」様子や「やすらぐ」様子を表していることがわかる。これは、「高」の対義概念とは関係ないようにも思われるが、「落ち着く」様子や「やすらぐ」様子は「下方向」概念を表示する。女性が家の中で炊事・掃除・洗濯などの家庭の仕事 (housework) をする場合、主に「立姿勢」をとって行う。そして、その合間や仕事を終えた後に、「座姿勢」や「横臥姿勢」をとって、落ち着いたりやすらいだりするるのである。つまり、漢字「安」は「立姿勢」から「座姿勢」や「横臥姿勢」への「下方向」の姿勢変化を含意するのである。ここから、「安」が「下方向」表示語であり、「低」と概念的に並行する部分があるといえる。では、以下に「円安」⇔「円高」の他に「安」と「高」とが対義関係として用いられている表現を以下 (3a-b) に挙げておく。

(3) a. 「安値」⇔「高値」

(3) b. 「安価」⇔「高価」

### 3.3. 日本語と韓国語漢字表記「敗北」の分析

次に、日本語漢字表現と韓国語漢字表記「敗北」の分析に論を移す。この共通する漢字表現における「敗」と「北」との概念的結びつきを明らかにするためには、「北」と「背」との概念的（または、漢字使用民族のモノの捉え方・考え方における）結びつきを論じなければならない。その理由を明らかにするためにまず「北」と「背」の解字を以下 (4a-b) にそれぞれ示す。

(4) a. 北

会意。人+匕。二人の人が背をむけている、そむくの意味を表し、転じて、逃げるの意味を表す。また、人は明るい南面に向いているのを好むが、そのとき背にする方、きたの意味を表す。

—『新漢語林』(s.v. 北) (下線筆者)

(4) b. 背

形声。月（肉）＋北<sup>ㄅㄨㄝˋ</sup>。音符の北は、人の背の方、きたの意味。肉体のうちのせなか・せなかにする・そむくの意味を表す。

— 『新漢語林』 (s.v. 背) (下線筆者)

これらの解字から、「人が南を向いている時に背にする方角が北」であることがわかる。われわれ人間の身体は「前面」「後面」と2つの「側面」の4つの面から成っている。これらの面の中で、人間がどの面を「前面」と捉えるかの基準になるのは「顔」の存在である。このように、「人（の前面）がどちらを向いているか」を判断する場合、人間は「人の顔」がついている方向を基準にするのである。さらに言えば、視覚動物である人間は「目」のついている面を「前面」と考えるのである。この顔の「前面」と「後面」の捉え方は、日本語、韓国語の漢字表記においてだけではなく、以下 (5a-b) に示す英語表現にも表れている。

(5) a. forehead : 前頭部

(5) b. the back of the head : 後頭部

このように顔／目のついている面は forehead (前頭部) と認識され、顔／目のついていない面は the back of the head (後頭部) と認識されるのである。この「前後の方向付け」と「顔／目」との関係性に対する認識は日本語の「～向き」を用いた表現にも表れる。これに関しては上野他 (2002) に優れた論考がある。以下の筆者の論述は同書に準拠するものである。まず、以下の実例 (6a-b) に着目する。

(6a) 花子の家は東向きです。

(6b) 太郎の部屋は西向きです。

(6a-b) の日本語表現は自然であるが、以下 (7) は不自然な表現となる。

(7) ? 次郎の部屋の (窓も戸も無い) 壁は南向きである。

(6a-b) と (7) とでは、どのような相違があるかを論述するために、まず (6a-b) が以下 (6a-b)' の省略文であることを示す。

- (6) a.' 花子の家 (の正面玄関) は東向きです。  
 (6) b.' 太郎の部屋 (の窓) は西向きです。

このような表現が可能になるのは日本語母語話者が「家／窓は人間である。」と見立て、「正面玄関」を「家全体の前面」、そして「窓」を「部屋の前面」と捉えていることの表れである。つまり、「壁」を「部屋の前面」と認識することはないのである。このような「家／窓」に対する認識は以下 (8a-c) に示すように英語にも共通している。

- (8a) Hanako's house *faces* east.  
 (8b) The window of Taro's room *faces* west.  
 (8c) ?The wall of Jiro's room *faces* north.

このように「家／部屋」が或る方向を向く場合には、動詞 *face* が用いられる。この *face* は (9) に示す歴史を持っている。

- (9) 7 《1594》 (…に) 顔を向ける  
 8 《1632》 …の方向に向く、…に面する；(建物等がある方向に) 向いている  
 —寺澤 (編) (1999) (s.v. *face*)

動詞 *face* は名詞の *face* (1290年頃初出) に由来する。これらの事から、英語母語話者も建物の「正面玄関／窓」を「顔」として捉えていることが明らかになる。これは、以下 (10) に示す言語表現にも通ずる。

- (10) 正面玄関 : front door

家の正面玄関は常に front で表されることも、「玄関」=「前面」という認識の表れである。また、window の歴史を遡っても「窓」と「前面」との概念的結びつきが垣間見える。以下 (11) の記載に着目する。

(11) window *n.*

《 ?a 1200 *Ancrene Riwe* 》窓

ME *windog* □ ON *vindauga* ← *vidr* 'wind' (風) + *auga* 'eye' (目)

cf. *eagpyrel* (窓) ← *eage* 'eye' + *pyrel* 'hole' <sup>4)</sup>

—寺澤 (編) (1999) (s.v. window)

この記載から、「窓」と「目」とが歴史的に深いつながりを持っていることが立証できた。つまり、「家 (正面玄関)」や「窓」は人間の前面に見立てることが出来る。「正面 (front)」や「目 (eye)」に対応する概念を持っているが、「壁」からはそのような概念を見出すことは出来ない。したがって、(7) や (8c) の表現は極めて不自然な表現と見なされるのである。

さらに、日本語には比喩的な意味で「向き」が以下 (12a-b) のように使われることがある。

(12a) 花子はセールス向きです。

(12b) 太郎は農業に向いていません。

これらの「向」は、以下 (12a-b)' のようにしばしば「適」概念で言い換えられることがある。

(12a)' 花子はセールス適しています。

(12b)' 太郎は農業に不適です。

しかし、「向」概念とは本来は既述した「人間が正面を向ける」、つまり「顔／目を向ける」という物理的な方向性を土台にしたメタファーと捉えることが出来る。こ

の「向」の物理的事象を示す概念は以下（13a-b）のような表現からも浮き彫りになる。

(13a) 花子はセールス向きなので、セールス活動に前向きです。

(13b) 太郎は農業に向いていないので、農作業に後ろ向きです。

これらの表現から「向」が「体の前面を向ける」概念を持っているとわかる。また「不向き」を表す表現には、以下（14a-b）のようなものもある。

(14a) 太郎は農業に向いていないので、農作業に背を向けている。

(14b) 太郎は農業に向いていないので、農作業から日を背けている。

このように、「不向き」は、「体の前面を向けない」イメージや「体の前面についている日を向けない」イメージで捉えられるのである。

これらの論述から、「北」と「背」との概念的結びつきが明らかになってくる。つまり、人間は日が照り好ましく思う南へ「前面」を向けるのである。結果として、「後面」つまり「背」が「北」を向くことになる。このような、人間の「前後の方向付け」と「向き・不向き」の観点を関連付けることで日本語漢字表現と韓国語漢字表現「敗北」における「敗」と「北」との概念的結びつきを理解することが出来るのである。（次号に続く）

#### 〈注〉

- 1) 「(その2)」は1.1. の「(日) 下心」から「(日) 金持」までの13項目を扱う。「(その3)」以降については、現在、整理中である。
- 2) ハングル表記「ㅁㅁ [pebe]」の漢字語表記は日本語と同様「敗北」である。にもかかわらず本論で取り上げた理由はこの「北」の漢字語の読みが極めて特殊だからである。韓国語の漢字語はハングル同様、一文字に対して一つの読みを持つのが普通で、例外として授業中に提示するのは次の(1)～(4)くらいであろうか。

- (1) 金 { 금 [kum]  
          { 김 [kim] : 固有名詞に限る
- (2) 不 { 부 [pu]  
          { 불 [pul]
- (3) 台 { 대 [de]  
          { 태 [te]
- (4) 車 { 차 [cha]  
          { 거 [gə]

「北」の漢字語読みは「南北 [nambuk]」のように [buk] であり、「敗北 [pebe]」と読むのは非常に稀である。

3) もちろん、「出」と「退」とが対義関係となっている他の表現もある。その一例が、「出陣」⇔「退陣」である。以下 (1a-b) に「出陣」と「退陣」の日本語の辞書記載をそれぞれ示す。

(1) a. 戦いや試合に出向くこと。戦場に向かうこと。「学徒一」「一式」

— 『明鏡国語辞典』(s.v. しゅつ - じん 【出陣】)

(1) b. ①陣地から軍隊を後方にしりぞかせること。

— 『明鏡国語辞典』(s.v. たい - じん 【退陣】)

このように「出」と「退」とを対義関係として用いる日本語表現はあるものの、本論で述べたように「退」と「入」との対義関係の方が結び付きが強いと思われる。

4) 日本語でも次のような表記が見られる。

① ま - ど 【窓・<sup>\*</sup>窗・<sup>\*</sup>牖】

（「ま (目) と (門)」の意）

— 『大辞泉』

② まど 【窓・窗・牕・牖】

## 《「目門」また「間戸」の意か》

— 『大辞泉』

英語 window の語源と並行させて、日本語「窓」の語源を上出①、②に共通する「目＋門」として論を進める。

## 〈参考文献〉

- Fauconnier, G. (1985) *Mental Spaces*. MIT Press. Cambridge.
- Gruber, A. S. (1976) *Lexical Structures in Syntax and Semantics*. North Holland. Amsterdam.
- Hornby, A. S. (ed.) (1995) *Oxford Advanced Learner's Dictionary (=OALD)*. Oxford University Press. London.
- Lakoff, G. And Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. University of Chicago Press. Chicago.
- Lakoff, G. And Johnson (1999) *Philosophy in the Flesh — The Embodied Mind and its Challenge to Western Thought* —. Basic Books. New York.
- Leech, G. N. (ed.) (1989) *An A-Z of English Grammar & Usage (=AEGU)*. Thomas Nelson and Sons. New York.
- 池上嘉彦 (1983) 『意味論』大修館書店. 東京.
- 市川繁治郎 他 (編) (1995) 『新編 英和活用大辞典』 (= *KDEC*) 研究社. 東京.
- 上野義和 (1995) 『英語の仕組み —意味論的研究—』英潮社. 東京.
- 上野義和 (2001) 「人体の概念化」(『大阪府立看護大学紀要』第7巻第1号)
- 上野義和 他 (2001) 『新しい視点から学ぶ言語と文化』英宝社. 東京.
- 上野義和 (2007) 『英語教育における論理と実践 —認知言語学の導入とその有用性—』英宝社. 東京.
- 上野義和・森山智浩 (2003) 『イメージ&カテゴリーの英単語』KK ウィン. 東京.
- 上野義和・森山智浩 (2004-2009) 「イメージ&カテゴリーによる語彙指導方法の構造改革」(その1—その10) (『元久論叢』第62号—第73号、京都外国語大学国際言語平和研究所.)

- 上野義和・森山智浩・入学直哉・李潤玉（2002）『認知意味論の諸相—身体性と空間の認識—』松柏社. 東京.
- 上野義和・森山智浩・福森雅史・李潤玉（2006）『英語教師のための効果的語彙指導法—認知言語学的アプローチ—』英宝社. 東京.
- 鎌田正 他（2004）『新漢語林』大修館. 東京.
- 河上誓作（編）（1996）『認知言語学の基礎 — *An Introduction to Cognitive Linguistics* —』研究社. 東京.
- 小西友七 他（編）（2001）『ジーニアス和英辞典』大修館書店. 東京.
- 新村 出（編）（1985）『広辞苑』岩波書店. 東京.
- 武村理（2000）『認知的アプローチによる外国語教育』松柏社. 東京.
- 寺澤芳雄（編）（1999）『英語語源辞典』研究社. 東京.
- 藤堂明保（編）（1991）『漢字源』学習社. 東京.
- 松村明（監）『大辞泉』小学館. 東京.
- 森山智浩（2008）『英語における語彙概念の応用研究—空間関係づけ範囲に関する単一語・連語表現を中心に—』（博士論文）京都外国語大学.
- 大阪外国語大学朝鮮語研究室（編）（1985）『朝鮮語大辞典』角川書店. 東京.
- 朱信源（編）（2005）『標準韓国語辞典』白帝社. 東京.（和訳、筆者）
- 斗山東亜編集局（2004）『日韓・韓日辞典』斗山東亜. ソウル.（和訳、筆者）
- 延世大学校言語情報開発研究院（2006）『延世韓国語辞典』斗山東亜. ソウル.（和訳、筆者）